に置く必要があると思われた.

10．血性乳頭分泌を認めた 3 例

高他　大輔，山田　達也，坂元　一郎
大木　　孝，中村　正治
（国立病院機構高崎病院　外科）

乳頭異常分泌は一般乳腺外来の約 3 ～ 5 %を占めているとされ, 以外と多い所見である. 非触知乳癌の発見契機となる所見のひとつであり, 早期診断の意味で重要である. 血性乳頭分泌を呈した 4 症例に対し乳管腺葉区域切除を施行し画像診断および病理結果を検討したので報告する.

症例は 33～80 歳の 4 症例で全て女性. 単孔性の血性乳頭分泌を認めた.

病悩期間は 1 週間から 8ヶ月であった. 分泌物の擦過細胞診は class Ⅱが 2 例, Ⅲが 1 例, Ⅳが 1 例であった. マンモグラフィではいずれも異常所見無し. US では 2 例で乳頭直下の乳管拡張像を認めたが, 病巣を直接描出することはできなかった. ウログラフィンによる乳管造影で病巣による陰影欠損を 2 例に認めた. 他の 2 例は乳管の途絶像を認めた.

メチレンブルーを乳管口より注入後, 傍乳輪切開で青染した乳腺に対し乳管腺葉区域切除を行った. 病理結果は 3 例が DCIS, 1 例が乳管内乳頭腫 (以下 IP) の診断で全て完全切除し得た.

術前に病理学的に悪性と診断できたのは class Ⅳの 1 例のみであった. 分泌物の擦過細胞診は変性が強いことが原因と思われる. 乳管造影, MRI で病巣の部位, 範囲はかなり正確に診断できたが, 質的診断をつけるには至らず全例手術を選択した.

血性乳頭分泌症例に対しては, 診断, 治療を含めた乳管腺葉区域切除が必要と考える.

11．乳腺症として follow up していた乳腺 PASH（Pseudoangiomatous Stromal Hyperplasia）の 1 例

星野　和男，仲村　匡也，橋本　直樹
（杏林会今井病院　外科）
土屋　眞一　　（日本医科大学　病理部）

乳腺の腫瘍類似間質病変である PASH (Pseudoangiomatous stromal hyperplasia) の 1 例を経験したので報告する. 症例 : 35 歳, 女性　主訴 : 乳癌検診, 現病歴 : 平成 17 年 3 月, 乳癌検診で右乳房 C 領域の硬結を指摘された. 現症 : 右乳房 C 領域に 2cm 大の境界の不明瞭な硬結を触知した. MG では category 1, 超音波検査では硬結に一致して不整形の低エコー像と内部に点状エコーが認められたため category 3-4 (DCIS or 乳頭腺管癌疑) と診断し CNB を施行した. 組織診断は乳腺症であった. 3ヶ月後に再度超音波検査を施行し CNB を再検したが組織診断は前回と同様で乳腺症であった. その後経過観察していたが平成 19 年 8 月他院で乳腺超音波検査を受け同部に腫瘤性病変を指摘されたため摘出術を希望して来院した. 手術所見 : 病変部を中心に約 1cm 離して摘出生検を施行した. 割面では, 病変部は弾性硬で境界明瞭な白色の瘢痕様組織所見であった. 組織診断は, 乳腺間質に 1 層の紡錘形細胞で覆われたスリット状間隙を有し, その周囲にはエオジン好性の厚い膠原線維が認められ, 乳腺 PASH と診断した. PASH は超音波検査で低エコー像として描出されるため, しばしば乳腺線維腺腫と臨床診断されて摘出生検されることが多いとされているが本例のように内部に点状エコーを呈したとの報告はなく珍しい症例と考えられた.

〈セッション 4 〉

初期治療

座長　内田　信之

12．神経線維腫症 1 型（NF 1 ）に合併した異時性両側乳癌の 1 例

佐野　　弘，竹内　英樹，中宮　紀子
重川　　崇，松浦　一生，三角みその
高橋　孝郎，藤内　伸子，大久保雄彦
大崎　昭彦，佐伯　俊昭（埼玉医科大学
国際医療センター　乳腺腫瘍科）
倉持　朗　　（同　皮膚科）

【症　例】 56 歳女性, 20～40 歳頃 NF1 症状自覚, 医療機関受診無く経過観察. **【現病歴】** 2004 年 8 月に左乳房腫瘤, びらん出血を自覚後, 11 月に症状増悪し当院皮膚科を経て当科紹介初診. **【現　症】** 皮膚に露出する 7cm の左乳房腫瘍認め, 針生検で浸潤性乳管癌 : T4bN1M0 stageⅢb との診断に至った. **【経　過】** 上記病変に対し術前 AC×4 → PTX×4 施行. PR にて 2005 年 6 月左乳房切除術施行. ER (＋) で ANZ 内服経過観察に移行した. 2006 年 6 月に 4cm の右乳房腫瘤指摘され, 針生検で浸潤性小葉癌 : T2N1M0 stageⅡB の診断に至り, 同年 9 月右乳房切除術施行した. リンパ節転移 30 個認め, 胸壁照射後, EXE 内服にて経過観察となった. 2007 年 5 月, 急激な血小板低下認め, 多発骨転移と骨髄転移の診断となった. 骨髄機能低下状態のため同意の下に開始した Xeloda も PD となり, 肝転移も急激に出現, 終末期緩和医療を経て骨髄転移症状発症から 7ヶ月後に死亡した. **【結　語】** NF1 はときに神経系悪性腫瘍の合併をみるが, 今回, 乳癌を異時両側性に合併した症例を経験したので, 若干の文献的考察を加え報告する.